

## 中学校陸上競技部のモラルに関する研究

Management of Track and Field Team in Junior High School from the Viewpoint of Morale.

鶴山博之

TSURUYAMA Hiroyuki

## I. 緒言

我が国においては、競技スポーツで活躍する選手の多くは、中学時代に始まる学校運動部活動がきっかけとなって競技を始めたと考えられる。総合型の地域スポーツクラブの活動が各地で始まってから約15年経過しているが、中学生、高校生の競技スポーツは中体連、高体連を中心とした競技会が依然として中心となっている。学校運動部のマネジメントに関する問題点はいくつか指摘されているが、学校部活動は学校教育の重要な構成要素となって定着していて、学校の活性化の上で部活動は不可欠な文化である（内海、1998）ことも事実である。

運動部はスポーツ活動を中心とした個人の集まりで、共通な目標や活動を持ち、メンバーに対面的な相互依存関係が存在し、我々の集団であるといった意識を持ったものである（松田、1975）。これら学校運動部はその成り立ち、成員の構成、種目、目的などその内容には大きな違いが認められる。これら学校運動部には多くの場合顧問教諭が存在し、監督・コーチとして指導に当たることが多い。この場合、コーチは単に競技者を創り出すということだけではなく、成員を社会的人間として成熟させることを目的として指導に携わることが必要である（庭木、1985）。また関岡（2008）は「コーチングがいかに工夫されたものであっても競技者自身に努力する姿勢がなければ、成果に結びつかない」とし、また「コーチの視点から考えれば、自己開発と自己管理ができる競技者に育てるための計画がなされ、遂行することがコーチングである」としている。また清水（2008）は「コーチングの命題は、自分のことが自分でできる競技者の育成である。そのためには、競技者があらゆる場面において主体的に行動することが必要である」とし、競技者の競技に取り組む姿勢の重要性を述べている。

運動部集団は指導者の指導方針や競技に対する価値観、考え方、練習方法（時間、内容）、練習施設、また成員の競技に対する姿勢により、部の雰囲気はかなり異なってくるものと考えられる。つまり多くのスポーツ集団はそれぞれの成員や組織が異なり、他の組織と異なったスポーツ集団としての固有性ととも、それぞれのスポーツごとの個別性も持ち合わせているといえる。それらの集団にはリーダーが存在し、組織の運営およびスポーツに関する技術指導などを行っているが、それぞれの組織に対して個別のマネジメントが必要であるというのが現実的であり（鶴山ら、2001）、リーダーシップに関する研究も多くなされてきている。

モラルとは本来軍隊の士気を表し、集団の団結力、結集度あるいは集団意識、集団精神、自発的な共同意欲を表している(賀川、1983)。竹村ら(1963)は「運動部のモラルは部員が部の目標に積極的な意義を感じ、強く結束してその目標達成のために協力する集団機能である」としていることから、部員のモラルが高いことは部全体の目標達成のためにも望ましいことであると考えられる。

賀川(1983)は「モラル育成のためには、その状況とその時機に応じて監督・コーチなどの指導者が肌で感じたことをどのように表現するか。また次に予測される場面への視覚的・心理的リーダーシップの表現方法に左右されるわけであるが、ややもすると監督・コーチはスポーツの勝負に勝つという一点に集約してコーチングする傾向から、選手の主体性と多様性を見落としがちになる。」としている。つまりモラルの育成のためには、チームとしてのまとまりに配慮するとともに、選手それぞれの個性に応じたマネジメントが求められる。

筆者らは学校運動部の中でも、多くの学校に存在する大学および高校の陸上競技部を対象にリーダーシップ、モラル、マチュリティに関しての研究を行ってきた。

多くのスポーツ集団にはリーダーが存在し、組織の運営およびスポーツに関する技術指導などを行っているが、それぞれの組織に対して個別のマネジメントが必要であるというのが現実的であり(筆者、2010)、リーダーシップに関する研究(Chelladurai ら、1980)(松原、1990)(三隅、1973)(永井ら、1998)(野崎ら、1989)(杉山、2000)は多くなされてきている。

陸上競技は典型的な個人競技であり、記録という客観的指標があるため評価がしやすい。また集団で練習を行っても、主体はあくまで個人であるという特徴がある。筆者らは女子体育大学陸上競技部でのモラル研究(1994)を行ったが、学年、ブロック(トラック競技、フィールド競技)ごとにモラルに差が認められた。また高校陸上競技部を対象にも行った(2011)が大学生との間に明らかな違いが認められた。このことは体育大学と高校とでは、集団の年齢、競技力、モラル、成熟度に違いによるためであると考えられる。ここでは大学・高校でのモラルと中学校でのものとを比較検討することから、筆者らが女子体育大学陸上競技部を対象にした研究での方法を用い、中学校陸上競技部のモラルの実態を明らかにすることにより、求められる陸上競技部の集団機能やその指導のあり方について検討するものである。

## II. 研究方法

本研究の調査は富山県内の中学校陸上競技部員 197 名(男子 102 名、女子 86 名、不明 9 名)を対象として行った。調査対象の陸上競技部はいずれも活動が活発であり、競技成績も高いほうの学校である。またそれぞれの学校の顧問(コーチ)の陸上競技についての競技歴、競技実績、指導実績については様々である。調査の方法はアンケート用紙により行い、調査期間は 2012 年 7 月 7 日～7 月 8 日であった。本研究は筆者らが丹羽ら(1972)の 20 項目のモラル調査に「部内の人間関係」と「部の機能」を加えた 22 項目を用いて行った先行研究(筆者ら、1994)で得られた因子に該当した 12 項目を用いた。それらの項目について自己評価させ、分析・考察した。各種目の測定スケールは「非常に思う」「思う」「どちらともいえない」「思わない」「全然思わない」の 5 段階評定を採用し、5 段階順にそれぞれ 5、4、3、2、1 の得点を与えた。先行研究で得

られた因子をそのまま用いることも考えたが、大学生、高校生に比べ発育発達にかなりの差があり、また競技を始めてから日の浅い生徒もかなりいることから、再度因子分析を行い、その因子スコアを算出した。因子スコアは因子に相当する項目の平均値を算出し、標準化(標準偏差が1.0、平均が0になるよう)したものを用いた。主因子法による回転前の固有値が1.0以上を基準とすべきであるが、すでに抽出された因子に関する項目をそのまま利用したことでもあり、第4因子と第5因子の固有値のとの間に大きな差が認められたため、固有値0.864以上の4因子とした。因子の単純構造を得るためにNormal-Varimax法による直交回転を実施し、因子負荷量0.500以上の項目を取り上げて因子の解釈・命名を行った。この結果、抽出されたモラル因子は4因子であり、全分散の74.0%が説明された。(表2)

満足度についてはChelladurai,P(1993)のリーダーシップに対する満足度から抽出された結果をもとに杉山(2000)が設定した「リーダーシップに対する満足度」と「結果に対する満足度」の4項目について同様に5段階尺度回答を求めた。また満足度については杉山が抽出した2因子をそのまま用い、さらにリーダーシップの満足度に関する2因子をそのまま目的変数として使用し、モラル要因を説明変数とする重回帰分析を行った。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. モラルに関する基本統計

表1. モラルに関する評価

アイテム	平均値	標準偏差
部における技術の指導がうまくなされている	4.158	1.069
私は部の目標達成のために頑張っている	4.101	0.987
部内の上級生と下級生との気持ちが合っている	4.036	0.877
部の目標達成のために部員全体が頑張っている	3.995	0.966
部全体としてまとまっていると思う	3.913	0.962
部の練習計画が能率的に行われている	3.872	1.073
現在の部の運営の仕方を部員が支持している	3.842	0.948
試合に出れる可能性は将来ある程度ある	3.786	1.193
部内でお互いの意見を出し合っている	3.760	0.999
部の目標と個人的な目標が一致している	3.663	1.160
部員の不平・苦情がうまく取り上げられている	3.337	1.156
部の目標が達成されやすい	3.189	1.079

表1はモラルに関する12項目の全体の平均値を示したものである。評価が高かった項目は「部における技術の指導がうまくなされている」(4.158)、「私は部の目標達成のために頑張っている」(4.101)、「部内の上級生と下級生の気持ちが合っている」(4.036)「部の目標達成のために部員全体が頑張っている」(3.995)であった。評価が低かった項目は「部の目標が達成されやすい」

(3.189)、「部員の不平・苦情がうまく取り上げられている」(3.337)、「部の目標と個人的な目標が一致している」(3.663)であった。これらのことから、技術指導および目標達成についての努力感は比較的高く、それ以外の部のマネジメントについては低い傾向があることが窺われる。高校陸上部を対象にした筆者の研究と比較しても同じような傾向が認められた。

## 2. モラールの因子構造とその解釈

表 2. モラールの因子構造(主因子、NORMAL VARIMAX)

	アイテム	因子負荷量
第1因子	向上性	
	部における技術の指導がうまくなされている	0.846
	部の練習計画が能率的に行われている	0.758
	現在の部の運営の仕方を部員が支持している	0.669
	試合に出られる可能性は将来ある程度ある	0.643
第2因子	一体感	
	部内の上級生と下級生との気持ちが合っている	0.779
	部全体としてまとまっていると思う	0.776
第3因子	目標達成	
	部の目標と個人的な目標が一致している	0.792
	私は部の目標達成のために頑張っている	0.782
	部の目標が達成されやすい	0.623
第4因子	意見尊重	
	部内でお互いの意見を出し合っている	0.806
	部員の不平・苦情がうまく取り上げられている	0.775

	F1	F2	F3	F4
固有値	5.844	1.223	0.954	0.864
寄与率	48.701	10.189	7.951	7.202
累加寄与率	48.701	58.891	66.842	74.043

筆者らが(2000)大学陸上競技部を対象に、丹羽ら(1972)の20項目を参考に作成した22項目を用いて行った先行研究におけるモラールに関する研究で5因子が抽出されたが、それらの因子に該

当する12項目をそのまま用いたが、年齢がかなり異なることから再度因子分析を行い、因子スコアを算出した。

第1因子は技術の向上や競技会出場の可能性に関する項目なので「向上性」の因子としてこれを解釈した。第2因子は部全体および他の部員との気持ちがどの程度合っているかという項目なので「一体感」の因子として解釈した。第3因子は個人や部の目標達成に関する項目なので「目標達成」の因子として解釈した。第4因子は部内の練習内容や生活についての意見の取り上げられ方に関する項目なので「意見尊重」の因子としてこれを解釈した。

筆者の高校陸上競技部を対象にした研究(2011)と比較しても、ほぼ同じ因子の構成となっていることが認められた。

## 3. モラール因子に対する部員の反応

## 1) 男・女別にみた因子スコア

表3は男女別の因子スコアを比較したものである。その結果、女子は男子に比較してすべての因子において因子スコアが高く、第1、第4因子において有意な差が認められた。「F1:向上性」において男女間に有意な差が認められたことから、女子のほうが技術を向上させ、試合で良い成績をとりたいという意欲が強いと考えられる。また「F4:意見尊重」において男子の因子スコアがかなり低いことから、女子に比べ男子のほうが部の運営、意見の取り上げられ方についての不満が多いのではないかと考えられる。

表3. 男女別因子スコアの比較

因子	男子	女子	T-値	P	
F1: 向上性	-0.120	0.197	5.130	0.020	*
F2: 一体感	-0.083	0.141	2.565	0.107	N.S.
F3: 目標達成	-0.112	0.150	3.465	0.061	N.S.
F4: 意見尊重	-0.129	0.221	6.224	0.013	*
N	102	86			

\* P&lt;0.05 N.S no significant

## 2) 学年別にみた因子スコア

学年別に因子スコアを比較してみると(表4)、1年生が2、3年生に比べ、どの因子についても高い傾向が示された。しかし1年生から2年生の段階で急激に低下していることが認められた。これらのことは、筆者がリーダーシップについて高校生を対象にして行った研究(2011)でもほぼ同様の傾向が認められた。またすべての因子で有意な差が認められた。このことから1年生は「人間関係を重視し、部全体が一体となって、部の目標を達成しよう」という姿勢が強く認められる。2、3年生についてはそのような傾向があまり認められず、部全体のことよりも個人を重視する傾向があるのではないかと考えられる。また自分たちの意見が指導者に取り上げられていないという不満があるのではないかと考えられる。1年生は入部後間もないため、初めて専門的な練習・指導を受けることになり、部活動という活動を含めて、新鮮に感じていることも影響しているとも考えられるが、自らの目標を失いかげ、向上心に陰りの出る3年生や、部内で中間的な存在であり自分たちの意見が取り上げられていないと感じることの多い2年生に対しては、それぞれの学年に適したマネジメントの必要性があると考えられる。

表4. 学年別因子スコアの比較

因子	1年生	2年生	3年生	F-値	P	
F1: 向上性	0.288	0.061	-0.293	6.514	0.002	**
F2: 一体感	0.343	-0.162	-0.132	6.221	0.003	**
F3: 目標達成	0.353	-0.035	-0.273	7.665	0.000	***
F4: 意見尊重	0.265	-0.225	-0.008	4.289	0.015	*
N	68	62	66			

\*\*\* P&lt;0.001 \*\*P&lt;0.01 \* P&lt;0.05

陸上競技は典型的な個人競技であり、競技に対する考え方、価値観、部全体についての考え方がそれぞれの部員間でかなり異なっていると考えられる。中学生は競技経験も浅く、競技に関する知識も少ない。それだけに個人に対する細やかな指導を心がけるとともに、部全体がまとまって目標に向かって努力する態度を育てるような配慮をするといった難しいコーチングが求められる。

## 3) 専門種目別に見た因子スコア

専門種目別に因子スコアを比較したところ、高校と同様に専門種目による違いは認められなかった。大学陸上競技部における専門種目間の比較では、トラック種目とフィールド種目の間にモラル、リーダーシップについて明確な差が認められている。(筆者ら 1994、1996、1997) また高校陸上競技部と大学陸上競技部との間に明確な差が認められており(筆者 2011)、練習形態の違い(大学では短距離、中長距離、跳躍、投擲などのブロックごとによる練習が行われるのに対し、中学・高校ではウォーミングアップ段階までは全員一緒に行うことが多い)によるものであると考えられる。つまり大学ではそれぞれのブロックに異なるリーダーがいてその影響を受けるのに対し、中学でも高校と同様に一人のリーダーが全般にわたって指導する場合が多く、そのためリーダーシップ同様モラルについても専門種目の違いによる差が認められなかったと考えられる。

4) 学校別に見た因子スコア

表5は学校別の因子スコアを示したものである。学校別の因子スコアの比較ではすべての因子において有意な差が認められた。佐藤(1995)は高等学校陸上競技部におけるリーダーシップスタイルについて「指示型」「委譲型」「厳格型」に分類され、競技意欲と指導スタイルは関係が強いとしているが、全因子で低い値を示したA、H校の指導者は競技に関する専門性、競技指導歴においてはやや劣ると思われる、この点が指導スタイルにも影響し、モラルの低さにつながっていると思われる。

表5. 学校別モラル因子スコアの比較

因子	A校	B校	C校	D校	E校	F校	G校	H校	I校	J校	F-値	P	
F1:向上性	-0.597	0.694	0.500	0.117	0.018	0.236	0.458	-1.571	0.013	0.185	8.867	0.000	***
F2:一体感	-0.681	0.749	0.316	-0.295	0.025	0.372	0.724	-0.256	-0.187	-0.082	4.003	0.000	***
F3:目標達成	-0.084	0.461	0.454	0.354	0.000	0.283	0.203	-0.937	-0.137	-0.191	3.345	0.002	**
F4:意見尊重	-0.131	0.873	0.198	0.120	-0.174	0.070	0.630	-0.466	-0.221	-0.064	2.267	0.020	*
N	15	5	22	20	21	20	19	15	29	30			

\*\*\* P<0.001 \*\*P<0.01 \*P<0.05

5) コーチから受ける影響

表6は学年別にコーチからどのくらい影響を受けているかを示したものである。5%水準で学年による違いが認められた。学年が進行するにしたがってコーチの影響を強く受けることが認められた。全体でもコーチから影響を「強く受ける」選手は40%を超え、「まあ受ける」選手を含めると70%を超えることから、高校陸上競技部の場合(筆者2011)よりやや低

表6. 指導者から受ける影響度の比較

因子	1年生	2年生	3年生
強く受ける	23(34.3%)	29(46.8%)	34(51.5%)
まあ受ける	23(34.3%)	21(33.9%)	12(18.2%)
受ける	16(23.9%)	7(11.3%)	11(16.7%)
あまり受けない	4(3.0%)	0(0.0%)	1(1.5%)
全く受けない	1(1.5%)	5(8.1%)	8(2.1%)
N	67	62	66

$\chi^2=19.43$  DF=8 P<0.05

いものの、コーチの影響をかなり強く受けていることが認められた。

表7はコーチから受ける影響度別に因子スコアを示したものである。第1、3因子で0.1%水準で、第4因子では5%水準で有意な差が認められた。コーチの影響を強く受ける選手ほど、競技に直接かかわる因子において高い傾向が認められた。高校における選手とコーチの関係と、中学校におけるそれとでは、部活動の学校教育における位置付けはそれほど変わらないと思えるが、高校のほうが生徒の競技歴も長く、専門性も高いと考えられる。しかし中学校においても高校と同様にコーチの影響を強く受ける選手ほど、競技に直接かかわる因子において高いことが認められた。各校のコーチには指導実績の違い、また指導のスタイルの違いがあると考えられ、どの学校のコーチがどのようなスタイルであるかについての客観的指標はない。しかしコーチから強い影響を受けているほど、モラルが高いことは高校同様明らかである。これらのことからモラルの向上にはコーチの存在が欠かせないことが明らかとなった。

表7. 指導者からの影響別モラル因子スコアの比較

因子	強く受ける	やや受ける	どちらとも	あまり受けない	全く受けない	F-値	P	
F1:向上性	0.269	0.101	-0.067	-0.053	-1.665	16.185	0.000	***
F2:一体感	0.147	0.032	-0.135	-0.179	-0.403	1.376	0.243	n.s.
F3:目標達成	0.208	0.028	0.045	-0.108	-1.260	8.016	0.000	***
F4:意見尊重	0.145	-0.013	-0.001	0.371	-0.784	3.048	0.018	*
N	86	56	34	5	14			

\*\*\* P<0.001 \*P<0.05 n.s. no significant

#### 6) モラルと結果に関する満足度

表8. 満足度に関する評価

アイテム	平均値	標準偏差
指導者は十分に私を指導してくれる	4.189	1.069
私は練習の方法や内容に満足している	4.091	1.166
私は記録・成績の向上に満足している	3.400	1.342
私は私の体力の向上に満足している	3.510	1.327

表8はリーダーシップと結果に関する満足度を示したものである。指導者や練習方法に関する「リーダーシップに関する満足度」は4点以上と高いのに対し、記録・体力の向上といった「結果に関する満足度」は3点

台半ばと、やや低い傾向が認められた。これらのことから、コーチの指導については比較的満足しているのに対し、競技成績や自身の体力・技術の向上については十分に満足しているとは言えないのではないかと考えられる。

#### 7) 満足度に関する学年別因子スコアの比較

表9は満足度に関する学年別の因子スコアを示したものである。「結果に対する満足度」について0.1%水準で有意な差が認められた。全体として「リーダーシップに関する満足度」「結果に対

する満足度」とも  
1年生が2、3年  
生に比べ高いこと  
が認められた。高  
校に比べ調査対象  
の中学陸上競技部  
の指導者は一部で

表9. 満足度学年別因子スコアの比較

因子	1年生	2年生	3年生	F-値	P	有意差
F1:リーダーシップに対する満足度	0.201	-0.021	-0.131	2.071	0.127	N.S
F2:結果に対する満足度	0.339	-0.194	-0.127	6.035	0.003	**
N	67	62	66			

\*\* P<0.01 no significant

専門性に劣る指導者もいるが、小学校とは異なり中学に入って初めて専門的な指導を受けることとなり、この点において入部後間もない1年生の「リーダーシップについての満足度」が高いと思われる。さらに 0.1%水準では有意な差が認められた「結果に対する満足度」では1年生に比べ2、3年生が低く、自分が期待していたような結果が残せていない部員が多いと考えられる。

8) 満足度とモラル因子の規定関係

表10は「リーダーシップに関する満足度」を目的変数とし、モラル要因の4因子を説明変数とする重回帰分析を男女別に比較したものである。分散分析の結果、全体、男子、女子それぞれについて回帰は有意であった。標準偏回帰係数からみると男女とも「F1:向上性」が高い貢献度で説明されている。男子では「F2:一体感」では若干のマイナスに、女子では「F4:意見尊重」がプラスに影響していることが認められ、男女間での違いが認められた。

表10. リーダーシップに対する満足度についてのモラルの規定要因

因子名	全体 N=197		男子 N=102		女子 N=86	
	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値
F1:向上性	0.609	75.27***	0.634	35.45***	0.524	31.98***
F2:一体感	-0.077	1.38	-0.158	2.95*	0.025	0.06
F3:目標達成	0.082	1.21	0.075	0.42	0.140	2.24
F4:意見尊重	0.123	3.16*	0.103	1.05	0.152	2.64*
重相関係数	0.703		0.691		0.681	
分散比	47.02 ***		22.22 ***		17.56 **	

\*\*\* P<0.001 \*\* P<0.01 \*P<0.05

学年の比較(表11)では2、3年生において「F1:向上性」が、1、2年生では「F4:意見尊重」が大きく貢献しているのが認められた。また2年生では「F2:一体感」「F3:目標達成」がマイナスに作用していることが認められ、学年による「リーダーシップに対する満足度」に対するモラルあり方が異なることが認められた。

表11. リーダーシップに対する満足度についてのモラルの規定要因

因子名	1年 N=68		2年 N=62		3年 N=66	
	標準偏回帰係数		標準偏回帰係数		標準偏回帰係数	
	係数	F値	係数	F値	係数	F値
F1:向上性	0.179	1.66	0.570	15.67***	0.760	57.84***



F2:一体感	0.119	0.78	-0.453	11.59***	0.080	0.82
F3:目標達成	0.048	0.13	-0.236	2.53*	0.107	1.05
F4:意見尊重	0.312	4.57**	0.500	11.77***	-0.080	0.76
重相関係数	0.547		0.627		0.818	
分散比	6.72 ***		9.21 ***		30.89 ***	

表 12 は「結果に関する満足度」を目的変数とし、モラル要因の 4 因子を説明変数とする重回帰分析を男女別に比較したものである。分散分析の結果、全体、男子については 0.1%水準で、女子については 5%水準で回帰は有意であった。標準偏回帰係数については全体、男子、女子とも「リーダーシップに関する満足度」を目的変数とした場合に高かった「F1:向上性」の貢献度が同様に高く、他の因子の貢献度が全般的に低いことが認められた。

表 12. 結果に対する満足度についてのモラルの規定要因

因子名	全 体 N=197		男子 N=102		女子 N=86	
	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値	標準偏回帰係数	F値
F1:向上性	0.328	13.53***	0.449	12.01***	0.169	2.05
F2:一体感	-0.031	0.14	-0.062	0.31	-0.085	0.45
F3:目標達成	0.096	1.04	0.001	0.00	0.156	1.72
F4:意見尊重	0.080	0.84	0.085	0.48	0.217	3.06*
重相関係数	0.432		0.477		0.369	
分散比	11.01 ***		7.14 ***		3.19 *	

\*\*\* P<0.001    \*\* P<0.01    \*P<0.05

## まとめ

本研究は中学校陸上競技部員を対象に、陸上競技部のスポーツ集団としての特性とモラルとの関係から、競技的スポーツ集団としての中学校陸上競技部のモラルの機能について検討を行った。結果は以下のように要約される。

1. モラルに関する 12 項目の全体の平均値で評価が高かった項目は「部における技術の指導がうまくなされている」(4.158)、「私は部の目標達成のために頑張っている」(4.101)、などであり、評価が低かった項目は「部の目標が達成されやすい」(3.189)、「部員の不平・苦情がうまく取り上げられている」(3.337)であった。これらのことから、技術指導および目標達成についての努力感は比較的高く、それ以外の部のマネジメントについては低い傾向があることが窺われる。高校陸上部を対象にした筆者の研究と比較しても同じような傾向が認められた。

2. 因子分析の結果、「F1:向上性」「F2:一体感」「F3:目標達成」「F4:意見尊重」の因子としてこれを解釈した。筆者の高校陸上競技部を対象にした研究(2011)と比較しても、ほぼ同じ因子の構成となっていることが認められた。

3. 男女別の因子スコアを比較では、女子は男子に比較してすべての因子においてスコアが高く、第 1、第 4 因子において有意な差が認められた。女子のほうが技術を向上させ、試合で良い成績

をとりたいという意欲が強いと考えられ、男子のほうが部の運営、意見の取り上げられ方についての不満が多いのではないかと考えられる。

4. 学年別に因子スコアを比較では、1年生が2、3年生に比べ、どの因子についても高い傾向が示される一方、1年生から2年生の段階で急激に低下していることが認められた。1年生は「人間関係を重視し、部全体が一体となって、部の目標を達成しよう」という姿勢が強く認められ、2、3年生では、部全体のことよりも個人を重視する傾向があるのではないかと考えられる。これらのことから、それぞれの学年に適したマネジメントの必要性があると考えられる。

5. コーチからの影響については、男女間での違いはないが、コーチから強い影響を受けているほど、モラルが高いことは明らかである。

6. 満足度とモラルの関係については「F1:向上性」の因子が強く影響していることが認められた。

これらの結果から、中学校陸上競技部における部員のモラルについて明らかにすることができた。本研究の結果から、現状の中学校陸上競技部の指導に関するポイントを指摘することができる。

中学校陸上競技部は学校教育の一環として行われていて、高等学校ほど学校の特色、環境、部員の特質などによる差はそれほど無く、どちらかと言うとコーチ（顧問教師）に影響される部分が多い。実際、コーチから強く影響を受ける選手のモラルが高いことが明らかとなった。モラル因子スコアの高い学校が競技成績も高い傾向にあることから、モラルを高めるマネジメントが競技力向上の点から、また円滑に部を運営するといった観点からも必要であろう。しかし高校以上に学年間における体力差が大きく、競技について様々な考え方を持つ部員が混在している集団であることが多い中学校陸上競技部で、どのようにしたらモラル因子を高めることができるかについては、高校以上に現場の指導者によるところが多い。それぞれの学年・男女に適したマネジメントの必要性があると考えられる。

学校運動部は競技力向上だけではなく、活動そのものに対しても喜びを感じさせるとともに、豊かな人間性、社会性を育てる指導が求められていることは当然のことである。つまり中学校陸上競技部におけるリーダーは、競技に関するトレーニング・技術指導だけではなく、スポーツマネジメントに対応できる能力が必要である。

陸上競技は典型的な個人競技であり、競技に対する考え方、価値観、部全体についての考え方がそれぞれの部員間でかなり異なっていると考えられる。中学生は競技経験も浅く、競技に関する知識も少ない。それだけに個人に対する細やかな指導を心がけるとともに、部全体がまとまって目標に向かって努力する態度を育てるような配慮をするといった難しいコーチングが求められる。

#### 引用・参考文献

Chelladurai,P., Saleh.S.D.(1980) Dimension of leader behavior in sports. Development of leadership scale. *Journal of Sport Psychology*, 2:34-45

賀川昌明 (1983) スポーツと競技の心理. 大修館 : 234

- 松原敏浩 (1990) 部活動における教師のリーダーシップスタイルの効果. 教育心理学研究, 38 : 312-319
- 松田岩男 (1975) スポーツ科学講座 6 スポーツの心理. 大修館 : 131
- 三隅二不二 (1973) リーダーシップ行動の科学. 有斐閣
- 永井純・佐々木秀幸・高井和夫・西野美紀子・大庭恵一 (1998) 陸上競技指導者のリーダーシップに関する研究. 陸上競技紀要, 11 : 10-22
- 丹羽劭昭 (1972) 運動部におけるモラル. 体育集団の研究, タイムス : 376
- 野崎武司・植村典昭 (1989) リーダーシップの構造づくり行動がスポーツチームに及ぼす効果. 体育・スポーツ経営学研究, 6 : 1-9
- 庭木守彦 (1985) 現代スポーツの社会心理, 遊戯社 : 155
- 佐藤正伸・長堂益丈 (1995) 競技者の競技意欲に対する指導者の影響. 陸上競技研究, 12 : 34-43
- 関岡康雄 (2008) コーチと教師のためのスポーツ論, 道和書院 : 42
- 清水 将 (2008) コーチと教師のためのスポーツ論, 道和書院 : 47
- 杉山歌奈子 (2000) 競技スポーツ集団におけるリーダーシップ研究. 日本女子体育大学修士論文
- 竹村昭・丹羽劭昭 (1963) 運動部のモラルの研究. 体育学研究 12-2 : 77-83
- 鶴山博之 (2010) 高校陸上競技部のリーダーシップに関する研究. 富山国際大学子ども育成学部紀要, 1 : 53-62
- 鶴山博之 (2011) 高校陸上競技部のモラルに関する研究. 富山国際大学子ども育成学部紀要, 2 : 87-95
- 鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一 (1994) モラルから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 7 : 29-35
- 鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一 (1996) リーダーシップから見た陸上競技部のマネジメントに関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 9 : 21-30
- 鶴山博之・畑攻・加藤昭・渡部誠・武田一 (1997) 競技的スポーツ集団としての陸上競技部の指導に関する基礎的研究. 陸上競技紀要, 10 : 25-33
- 鶴山博之・畑攻・杉山歌奈子 (2001) 競技的スポーツ集団におけるリーダーシップの固有性・個別性に関する研究. 体育・スポーツ経営学研究, 16 : 29-42
- 内海和雄 (1998) 部活動改革. 不昧堂出版 : 191